

2023  
特選  
日本銀行  
総裁賞

第21回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

## 自分の足元から考える環境と経済の両立

茨城県・霞ヶ浦高等学校 1年 斎藤 彩葉

私は、田畑と森林に囲まれた自然豊かな農村で生まれ育った。1日にバスが2本しか出ない。また近くのお店と言えば、およそ2キロメートル離れたコンビニエンスストアだ。小学校は約3キロメートル離れた場所にあり、6年間地域の班で歩いて登下校していた。

そんな田舎に18年前、東京から新規就農者として移住、いわゆるIターンをしたのが私の両親であり、子育てと共に自然農法を実践し、地元のスーパー、直売所、インターネットで作物を販売して生計を立てている。

私も小さい頃からよく畑に連れてってもらい、両親の働く姿を目の前で見れていた。地域の人からは、不思議な目で見られていた。地元から出て行ってしまふ人はいても、都市部から移住して来る人は、私の両親以外おらず、めずらしいことだったのだろう。移住したての頃は、農村独特の風習や文化、価値観に慣れるのが大変だったらしい。今、ようやく移住18年目で、メディア等で田舎暮らし、Iターン、有機農業などが取り上げられることも影響してか、声をかけてくれる近所の人も出てきた。

私の家の近くに、年の近い友達が数人いるが、その友達はみんな近所に親戚や知り合いがいる。しかし、私の家族にはおらず、すぐに頼れる人がいない。そんな中、困った時自分の力で何とかするために両親は、日々の一つ一つのことをよく考えて生活していた。PDS (Plan Do See 計画、実施、観察) のサイクルが大切なのだそうだ。そんな家庭環境から問題・課題を見つけ解決する姿勢がついたようだ。

高校生になった私は、日々の生活や学校でどのようなことを学び経験したのだろうか？ これまでの暮らしから学んだことを再認識し、具体的に将来に結びつけて考え、今まで以上に行動につなげていきたい。

自分の将来を考えていくにあたって、地元の未来についても考える必要があ

ると強く感じている。地域の人々と共に生活しながらフレキシブルに適応し、改善させていくには、大変時間がかかると両親は言う。

私が思う地元の問題・課題は、少子高齢化に伴う労働人口の減少による、地域を支えていく人材不足の解決である。この問題は、学校の教科書によく似たようなことが書かれているが、教科書の中の話ではなく、目の前で起こっていることであり、学習を超えたりアルな難題で、より多くの知見・経験が必要だ。

少子高齢化に伴い発生する具体的な問題は、農地や森林など今まで管理していた方の高齢化による、土地の管理の担い手減少や後継者の不足問題、空き家の増加、集落の公民館の維持、修理の負担などが挙げられる。

私が最も注視していることは、農地の問題で、年々耕作放棄地が増え、誰も管理していないことだ。農地がいつの間にか地元以外の人に買い取られ、地域の景観や生物の多様性、住民の住居環境を脅かすような産業廃棄物を積む場所になってヤード化してしまう問題だ。

実際に、私の地元の人が耕作をやめた土地に高さ40メートルを超える産業廃棄物の土砂の山が住宅地のすぐ近くに作られてしまった。近隣に高速道路のインターチェンジがあり、東京から近く土地が安く、買い手にとって好条件のため、このような事例も起こり得る。

その山は、大雨が降ると土砂崩れを起こすことがしばしばあり、町道にまで土砂が流れて、通行止めになっている。この問題を解決するために、地元の人や父も参加して県庁へ訴えに行き新聞にも取り上げられた。地元の人達によると、町や県と住民の間で何度も話し合いが行われているが、誰が負担するのかなど解決の糸口がみつからないとのことだ。

産業廃棄物以外にも太陽光パネルが森林を切り開き緑豊かな自然環境を破壊している。一見、再生可能エネルギーとして環境に優しいように言われるが、より長期的な視点で科学的に検証する必要がある。森林が減少することにより、動植物も減り、風や日光を遮るものが無くなり、気温が上昇することも考えられる。クリーンエネルギーが逆に、地球温暖化を進行させている側面もあり、電力の発電というプラス面だけを考えるのではなく、グローバルかつローカルな視点で考え、地域住民を主体とした合意形成を築く必要もある。

私はウサギが主人公の童話の「ピーターラビット」が子どもの頃から大好きだ。

私の住んでいる場所の周辺は、自然の宝庫で本物のウサギに出会うこともできる。ピーターラビットを描いた作者のビアトリクス・ポターは、ナショナル・トラストの活動をイギリスの湖水地方で行っていたことでも有名である。ナショナル・トラストとは、町民が自分たちのお金を信託し、身近な自然や歴史的な環境を買い取って保全するなど、次世代に残す運動である。私の理想的な自然保護のあり方は、ナショナル・トラストに近い。ポター女史同様、土地を豊かに守る事例についてこれからも学んでいきたい。

現在の私は、金融や経済について勉強不足な部分も多いが、身近なことから子どもでもできる「無駄使い」を減らすことに関して少しずつ分析している。

私は地元で払っている区費の使い道について、地区の総会の資料を基に調べた。会議費、募金、消防費、ゴミ拾い活動、保険料、地区の公民館の維持費、電気代などに使われていた。その中で最も支出が多かったことは、公民館の修理だった。建物の老朽化が進み、修理は確かに必要だったかもしれないが、私にとっては無駄だと思った箇所もあった。それは、木の看板から銅色の輝いた豪華な看板に作り変えたことだ。どのくらいの費用が掛かったかは分からないが、今後のことを考えたら積み立てた資産を老若男女、将来の世代にわたって使い続けていける持続可能な資産として捉え、運用すべきだと考える。

例えば、昔は農産物の集荷所だった建物があるが、そこは雨漏りで、畳が腐り始めている。地元の人で、「床を畳ではなく、土間にすれば雨漏りしても大丈夫だ。」と提案した方がいたと聞いた。その意見から私は、今までの状態を維持し続けることを重視しつつ、リノベーションして、「温故知新」地元で代々根づいて受け継がれてきた伝統的な知恵からも学び、新しい価値を創造し包括的に持続可能なものに改善していくことが大切だと思う。

これまでの先祖代々という伝承と共に、他の地域や移住者など地元の人ではない人と共にバトンをつなぐ時代に変化していかなくてはならない。その時にお互いの価値観に関心を持ち尊重し合い、協力していく関係性が何より必要だ。多世代にわたって、誰もが地域の当事者としての責任が求められると私は考える。

私は、両親の実践から学びながら、自分の生まれ育った地域を、この後生まれてくる次の世代と共有し、未来志向の地域社会にしていけるよう、自分にで

きることを一つずつ足元から増やしていきたい。

身近なことから始めようと思い、私の通う高校に掲示されていたポスターをきっかけに、「若い力で地域を盛り上げよう」をテーマとする町の生涯学習課主催の「高校生会」に入会した。今後活動に参加していく中で、問題解決の実務能力を身に付けていきたい。

「まず、お金が必要だ」という漠然とした発想から脱却し、持続可能な社会形成のために、「どのようにお金を使えば本当に有効な使い方になるのか」という多角的な視点を中心に据えて、今後も問題意識を持って金融と経済について考察し続けていこうと思う。

参考文献：ジュディ・テイラー著、吉田新一訳「ビアトリクス・ポター 描き、語り、田園をいつくしんだ人」、福音館書店、2001年出版

